

孤独な未亡人

田端里美

明治期の国際派女性に焦点を当て、何度か本項を書かせていただきました。今回の主役は「青山みつ」です。当時は稀であった国際結婚により、異国の地へ嫁ぐこととなった女性のお話です。

青山みつ（後に自ら光子と称す）は、1874（明治7）年11月16日に東京市牛込区納戸町（現：新宿区納戸町）で産まれます。骨董品店を営む父、喜八と母、つねとの間の子ともでした。彼女は小学校教育を修了した後、明治の代表的な社交場であった「紅葉館」に勤めます。

紅葉館とは、1881（明治14）年に開業した会員制の高級料亭です。そこは上流階級の人しか利用することができなかったため、おもてなしをする女中は相当な美人であることが必須でした。紅葉館で働いていたということからも分かりますが、みつは当時の日本女性としては珍しく、背が高く、周りから見ても絶世の美女だったそうです。その美しさから、後に夫となるハインリッヒの目にも留まったのでしょう。

ハインリッヒ・クーデンホーフ＝カレルギー伯爵とは、オーストリア＝ハンガリー帝国の駐日代理公使として赴任してきた折に出会います。この時代に多いように、彼女らの出会いがいつ、どこでだったかは定かではありません。ひとつの噂によると、ある冬の日、ハインリッヒを乗せた馬が喜八の骨董品店の前の道を歩いていたところ、氷の張った地面に馬が足を滑らせ、彼はそのまま落馬してしまいます。そして、その救護をしたのがみつだったとされています。当時の日本人にとって外国人は珍しく、関わったことがなかったため、みなが遠巻きに見つめる中、みつだけがすぐに彼に駆け寄り助けたのです。彼女は紅葉館で働いていた経験から外国人と接する機会が多くあり、躊躇することなく、側に寄ることができました。その懸命な救護姿と彼女の美しさに惹かれたハインリッヒが、オーストリア公使館に勤めてくれないかと交渉し、ふたりの仲が近づいたのではないかとされています。正式な結婚の日付は不明ですが、結婚をするにあたり、みつはカトリックに改宗しています。

その後、ふたりの間には1893（明治26）年に長男ハンスが、翌年には次男リヒャルトが誕生します。そして1896（明治29）年には東京からボヘミアへと旅立ちます。当初の予定では3年で日本に帰ることになっていましたが、ハインリッヒが領地の監理を

任せていた監理人の不正が発覚し、東京へ帰ることが困難となりました。その後も彼女は日本へ帰りがつづいていましたが、結局、一度もその願いは叶うことなく、ヨーロッパの地に骨を埋めることとなるのです。

渡欧した当初は女学生に戻ったかのようにドイツ語やフランス語、算術、地理、歴史などの勉強に励みます。また貴族たちの集まる華やかな場に招待されても見劣りすることがないほど、気品に溢れた所作で、周りを圧倒させていたようです。煩雑な貴族の儀式も立派にこなし、美しい礼儀作法や佇まいなどは、紅葉館での仕事や稽古事で培われたものでした。黒い髪と黒い瞳を持つ東洋の美しい伯爵夫人として、社交界の場でも注目を集めていたと言われています。

しかし彼女の幸せな時間は長くは続きませんでした。1906（明治39）年にハインリッヒが突然の心臓麻痺により、47歳という若さで亡くなります。

ハインリッヒが亡き後、彼女は夫の後見人として、子どもたちを守る母として、強く厳しい女性へと変わっていきます。子どもたちを立派なヨーロッパ人として育てるべく、教育熱心になり、使用人に対しても厳しく当たるようになりました。ハインリッヒが存命中は物静かで控えめな性格であった彼女が、厳格で、専制的な母親へと変わっていったのです。そんな母親に嫌気がさして、子どもたちは年を重ねるごとに彼女から離れていきます。子どもたちとの心の通わない孤独な生活は、1941（昭和16）年に彼女が亡くなるまで続きます。

そんな彼女にとって救いだったのは、次女のオルガだけは最期の時まで傍にいてくれたということでした。異国の地で、孤独なままひとり寂しく死んでいくというのは、想像するだけで辛く、悲しいことだと思います。外国人と関係をもつことが珍しい時代に国際結婚をし、言葉も通じないような遠い外国の地で生活することや子育てをすることは、半端な覚悟ではできません。しかしそれをやってのけた青山みつという女性は、強い心を持った日本人女性像として、これからも多くの人の心に残る人物になるのではないのでしょうか。

参考文献

- 植木武編『国際社会で活躍した日本人』弘文堂、2009年。
- 円地文子監修：佐藤愛子編『国際舞台の女性たち』集英社、1981年。
- 堀口進著『クーデンホーフ・光子の生涯』宝塚出版、2003年。
- クーデンホーフ光子著；シュミット村木眞寿美編訳『クーデンホーフ光子の手記』河出書房新社、2010年。
- 木村毅著『クーデンホーフ光子伝』鹿島研究所出版会、1976年。

たばた さとみ（司書・非常勤職員）